平成 27 年度教職大学院派遣研修研究報告書

| 派遣者番号 | 管 27K09 | 氏　名 | 先﨑　達彦 |
|---|---|---|---|
| 研究主題<br>―副主題― | 学習評価と学習指導の一体化<br>－ミドルリーダーを軸とした協働型授業設計の在り方－ | | |
| 所属校 | 足立区立千寿小学校 | 派遣先 | 東京学芸大学教職大学院 |

| 項　目 | 内　容 |
|---|---|
| Ⅰ　研究の目的 | １　研究の目的<br>本研究では、学習評価と学習指導の一体化につながる現場に即した授業設計の在り方について、実践的なアプローチを基に検討することを目的とする。また、この目的を達成するために、副主題を「ミドルリーダーを軸とする協働型授業設計の在り方」とする。<br>本校では、今年度「活用力向上モデル校」として、研究主題を「主体的に学ぶ児童の育成－活用する力を高める算数科の指導法の研究－」とし、算数科における「活用する力」を意識した授業実践や評価方法の工夫を行う。そこで、本研究の対象を算数科に絞り、習熟度別少人数指導における授業設計の在り方を追究することとする。<br>２　問題の所在と背景<br>中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（2010 年３月）では、学校現場において、学習指導の改善や教育課程全体の改善につながる学習評価の意義・目的を踏まえ、言語活動を通して育成する、思考力、判断力、表現力等について、各教科の対応する観点において適切に評価することを求めた。<br>しかしながら、同報告では、学習評価の現状と課題について、「現在の観点別学習状況の評価と目標に準拠した評価は、小・中学校において教師に定着してきているが負担感がある」との声や、「高等学校においては、小・中学校ほど観点別学習状況の評価が定着していない」等の現状を指摘した。<br>ＰＤＣＡサイクルによる授業改善を実現し、現場主義の学習評価をどのように推進すべきであろうか。<br>また、研究対象とした算数科少人数指導の授業設計では、学年単位で、学年主任及び算数少人数担当教員などのミドルリーダーが中心となって行っている。学級の枠を外し、複数の教員による指導体制において、学習評価や学習指導に関する共通理解・共通行動は重要な鍵となる。授業設計において、ミドルリーダーに求められる役割はいかに在るべきか。<br>さらに、前述の報告では、評価規準・評価方法の研究開発の推進について、「思考力・判断力・表現力等を評価するに当たって、パフォーマンス評価に取り組んでいる例も見られる」とある。いわゆるペーパーテストに頼りすぎず、子供一人一人の学習状況を的確に把握し、客観的で適正な評価を行うことが、学習指導の改善につながると考える。<br>３　研究仮説<br>ミドルリーダーを軸とした教師の協働による組織的な授業設計の在り方を提案し、現場に即した学習評価の効率化・簡素化を図ることで、学習評価と学習指導の一体化につながるのではないか。 |
| Ⅱ　研究の方法 | １　基礎研究<br>（学習評価・「逆向き設計」論・パフォーマンス評価・ミドルリーダー論）<br>２　調査研究（授業観察・意識調査）<br>３　実践研究・「授業設計シート」の開発と授業設計の実践<br>・若手教員への授業支援及び指導助言 |
| Ⅲ　研究の結果 | １　基礎研究<br>(1) 学習評価<br>教育評価は、一般的に、教師がテストを行い、通知表や指導要録をつける行為として捉えられがちである。しかし、本来の教育評価の営みは、目標に準拠して行われ、学力の伸長を目指して指導を行い、学力評価を基に教育効果が確かめられ、授業の改善に生かされるものである。<br>(2)「逆向き設計」論<br>学習指導要領の目標に準拠した評価は、指導の前に目標を明確にして、それによって子どもたちの実態を捉え、指導の改善を図ることが重要である。<br>しかし、目標に対応した評価方法の開発については十分ではなく、また、あまりに過剰に細分化された学力評価計画は、実行可能性・妥当性の点で疑問が生じると指摘し、これら |

| | |
|---|---|
| | を克服するカリキュラム設計として、西岡(2014)は、「逆向き設計」論を紹介している。<br>(3) パフォーマンス評価<br>「逆向き設計」では、「知の構造」の捉え方とともに、様々な評価方法を組み合わせて用いることが主張されている。そして、教科の中核部分に位置する「永続的理解」を保障するためには、パフォーマンス課題を用いて評価することが必要であるという。パフォーマンス評価について、松下(2014)は、「『パフォーマンス課題』によって学力をパフォーマンスへと可視化し、『ルーブリック』(評価指標) などを使うことによってパフォーマンスから学力を解釈する評価法」と述べている。<br>(4) ミドルリーダー論<br>評価と指導の一体化を学校現場で実現するには、学校全体での組織的な取組が必要である。日常の授業が学年単位あるいは教科部会単位で行われていることを考えると、それらの実現のためのミドルリーダーの役割は大きい。<br>期待されるミドルの役割について、末松(2012)が紹介する「トップがミドルに認識し期待する７つの役割」は興味深い。(①教授・学習活動②ビジョン構築と方向付け③教員の指導・マネジメント④コミュニケーション⑤役割変容⑥自己のリーダーシップ開発⑦挑戦)<br>２　調査研究<br>(1) 授業観察<br>所属校における学習評価及び授業改善の実際について調査を行った。(「授業観察シート」による授業評価及び振り返り)<br>(2) 意識調査<br>学習評価と学習指導についての実施状況及び実感について、教師への意識調査を行った。(都内公立小・中学校、計６校。回答数 87 名)<br>(3)　結果及び省察<br>・目標に準拠した評価や観点別学習状況の評価について、一定の実績と定着が見られた。校内での情報共有や校内研究により、指導計画や指導方法、教材や題材を改善する試みが概ね広がっていることが分かる。<br>・評価方法について、４観点の評価の関係性はあまり考慮されず、独立した評価方法を用いていた。特に「関心・意欲・態度」の評価は、児童・生徒の学習状況を肯定的に捉え評価していたが、ともすると突出した評価になる懸念がある。<br>・教員の評価への負担感は未だに強く、教職員間での共通理解も思うように実感できていないことが課題として分かった。<br>３　実践研究<br>(1)「授業設計シート」の開発と授業設計の実践<br>ミドルリーダーを中心に教師の協働による評価と指導の改善のサイクルを実現するために、授業づくりのツールとなる「授業設計シート」の開発と実践を行った。<br>(2) 若手教員への授業支援及び指導助言<br>「授業設計シート」に基づき、所属校において若手教員への授業支援ならびに授業観察後の振り返りにおける指導助言を行った。<br>(3)結果及び省察<br>・授業設計シート」に基づく授業づくりは、教材解釈・指導と評価の明確化・授業改善を促すツールとして活用できる可能性があることが分かった。<br>・ミドルリーダーは、教師の協働を促す関わりを随所に行っていた。<br>・ＰＤＣＡサイクルを重ね、評価と指導の一体化を一層図る必要がある。 |
| Ⅳ　考察 | 「逆向き設計」論に基づく「授業設計シート」を活用した授業づくりは、教材研究・指導計画や評価方法の在り方を見直すばかりでなく、教師の協働による授業づくりを促したり、実践の蓄積が学校の財産となって次の指導者へと引き継がれたりするなど、一定の効果があることが分かった。教師の「授業づくりのための思考ツール」として、「教師の協働を促すコミュニケーションツール」として、「授業改善を繰り返し、学校知を残すためのツール」として、今後も活用を促したい。<br>課題として、学習評価という研究テーマはその扱う範囲が広く、視点が絞り切れなかった。次期学習指導要領をめぐる議論の中においても、学習評価は注目を集めている。学習観・評価観の転換が迫られる中、本研究の成果を学校現場へと生かしたい。 |